

会 議 録

会議の名称	令和3年度第2回上尾市総合教育会議	
開催日時	令和4年2月8日（火） 午前10時30分～12時00分	
開催場所	本庁舎3階 庁議室	
議長(委員長・会長)氏名	畠山 稔 (市長)	
出席者(委員)氏名	教育長 池野 和己 教育長職務代理者 中野 住衣 教育委員 大塚 崇行 教育委員 内田 みどり 教育委員 小池 智司 教育委員 谷島 大	
欠席者(委員)氏名		
事務局(庶務担当)	市長政策室長 柳下 貴之、同次長兼秘書政策課長 井上 雅文 秘書政策課主任 水城 祥彦	
会 議 事 項	1 議 題	2 会議結果
	(1) いじめ・不登校について (2) スポーツ科学拠点施設について	報告・説明と質疑応答 報告・説明と質疑応答
議事の経過	別紙のとおり	傍聴者数 4名
会議資料	別添のとおり	
<p>議事のでん末・概要に相違なきことを証するため、ここに署名する。</p> <p style="text-align: center;">令和 年 月 日</p> <p style="text-align: right;">議長(委員長・会長)の署名 _____ 畠山 稔 (※原本は自署)</p> <p style="text-align: right;">議長に代わる者の署名 _____ (議長が欠けたときのみ)</p>		

議事の経過

発 言 者	議 題 ・ 発 言 内 容 ・ 決 定 事 項
<p>司会 (市長政策室長)</p>	<p>皆様、こんにちは。 本日は、お忙しい中ご出席を賜り、誠にありがとうございます。 只今から、令和3年度 第2回上尾市総合教育会議を開会させていただきます。私は本日の進行を務めさせていただきます、市長政策室長の柳下と申します。よろしく願いいたします。 それでは初めに、本会議の設置者であります畠山市長から挨拶を申し上げます。</p>
<p>市長</p>	<p>教育委員の皆様には、日々上尾の教育の発展のためにご尽力を頂き心から感謝申し上げます。 新型コロナウイルス感染症については、これまでにない急激な勢いで感染が拡大しており、本市では年明け以降だけで2,600人を超える感染者が確認されております。学校現場への影響も大きく、毎日のように学級閉鎖の報告も受けておりますが、工夫を凝らし、子どもたちの学びを止めないよう努力いただいている先生方には感謝を申し上げます。また、3月からは5歳から11歳までの子どもへのワクチン接種も始まりますので、市としては接種体制の構築に万全を期して参ります。 さて、本日は今年度2回目の総合教育会議となります。今回は、不登校・いじめの問題を議題としております。特にいじめ問題については、川口市の話題が大きく取り上げられているところです。この後、改めて最新の件数等の報告もあると思いますが、年々報告件数が増えてきております。ただ、これは小さなことも見逃さず報告をするという意識が根付いてきたものだと思っております。これはひとえに教育長が繰り返し学校側の意識改革を進めてきた賜物であると思っております。 今後も、皆様方との連携を一層強化し、不登校やいじめ問題の根本的な部分の解決に向けて議論を進めて参りたいと考えておりますので、ご協力をお願いいたしまして、挨拶とさせていただきます。</p>
<p>司会 (市長政策室長)</p>	<p>それでは、早速ですが要綱の定めにより議事を進行させていただきます。皆様のご協力をお願い申し上げます。 初めに、本会議の公開についてでございますが、本会議は原則公開となっております。 本日、傍聴を希望される方はいらっしゃいますか。</p>
<p>事務局</p>	<p>傍聴者が4名いらっしゃいます。</p>
<p>司会 (市長政策室長)</p>	<p>只今から傍聴者に入場していただきます。事務局は傍聴者を入場させていただきます。</p>

<p>司会 (市長政策室長)</p>	<p>傍聴者に傍聴上の注意を申し上げます。 先ほどお配りしました「傍聴に当たっての注意事項」をよくお読みいただき、遵守するようお願いいたします。注意事項に反することがあった場合には、退場していただく場合がありますのでご了承願います。</p>
<p>司会 (市長政策室長)</p>	<p>それでは、議題1「不登校・いじめについて」でございますが、前回会議では件数報告のみとさせていただき、議論を持ち越したものです。 改めて最新の状況等について学校教育部長から説明をお願いします。</p>
<p>教委事務局 (学校教育部長)</p>	<p>はじめに、不登校の現状についてご説明いたします。 文部科学省の「令和2年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果」によると、全国の小・中学校における不登校児童生徒者数は、196,127人で前年度を14,855人上回っております。全国の不登校児童生徒数は8年連続で増加しており、過去最多を更新し続けている現状があります。本市においても同様に、引き続き喫緊の課題であります。 平成29年度からの推移を見ると年々増加傾向で、今年度も12月末現在において、小学校・中学校ともに既に昨年度の数値を上回っており、本市においても増加傾向であることが伺えます。 続きまして、教育センターでの教育相談全体の延べ件数と不登校に関する教育相談の延べ相談件数の推移になります。不登校に関する相談は教育相談全体の約8割を占めており、本市においても不登校で悩み相談しているご家庭が多いことが分かります。 本市では「総合的な不登校対策・支援プロジェクト推進計画」のもと、総合的な不登校対策を行っております。対策として本センターが行っていることをご説明いたします。 一つ目は、不登校児童生徒の欠席状況等の把握です。各学校から月末に月例欠席状況報告書を提出していただき、児童生徒の欠席、関係機関との連携の状況等の把握を継続的に行い、不登校に関する調査・研究を行っております。 二つ目は、上尾市不登校対策スタンダードの推進です。「新規の不登校児童生徒を生みださない各校の組織的取組」や「自校の大切な児童生徒であることを念頭においた社会的自立を目指した支援」の達成のために、教育相談主任、さわやか相談室相談員の研修会を実施したり、スクールカウンセラーの活用状況を把握したりするなどして、学校と共通理解のもと、不登校対策に取り組んでおります。 三つ目は、学校・家庭・関係機関との連携です。本センターで教育相談にかかっている児童生徒を中心に、学校・家庭・関係機関との連携を進めているところです。昨年度は、学校向けに「不登校児童生徒に対する教職員対応の手引き」、地域向けに「不登校対策リーフレット」を発行し、支援体制の充実に努めております。今年度の取組としては、資料4のとおりセンター内に「情報コーナー」を設置いたしま</p>

した。フリースクール、医療機関、各種相談先等、様々な相談先の情報を掲示し、来所された方々が自ら情報を入手することで、他機関につながる一助となっております。また、児童生徒が通うフリースクール、民間施設等とは適宜情報交換を行っております。

四つ目は、教育センター内の教育相談・適応指導教室の充実です。資料5をご覧ください。今年度10月から本センターではICT環境の充実のためWi-Fiを導入いたしました。来所している児童生徒がオンラインドリル学習を行ったり、教育センター職員が学校関係者や面談者とオンラインで相談したりすることが可能となり、試行錯誤しながら実践を積み重ねております。実際に、来所時に毎回学習者用端末を使用して学習している生徒もおります。

五つ目は、スクールソーシャルワーカーを活用したアウトリーチ支援体制の充実です。複雑な背景のため、支援が必要な家庭が増えていたり、不登校のため本センターまで来所することがままならない状況があったりすることから、アウトリーチ支援へのニーズが年々拡大しております。特に、市費スクールソーシャルワーカーが増員になった令和2年度の相談件数は目を見張るものがあります。今年度は、2月現在の状況として、昨年度と同数の派遣依頼を受けており、相談件数は昨年度以上になることが予想されます。また、スクールソーシャルワーカーの相談件数は、全教育相談件数の約6割を占めるほどになっており、支援体制の充実が更に求められております。

以上が不登校に関する説明となります。

続けて、令和3年度のいじめの現状についてご説明いたします。令和4年1月31日現在の認知件数は、小学校647件、中学校136件となっております。小学校では、昨年度同月比で1.5倍、中学校は1.3倍の認知件数となっております。

令和4年1月31日現在の解消報告件数は、令和2年度までに認知した事案も含めて、小学校483件、中学校80件となっております。昨年度同月比で、小学校は2.3倍、中学校は1.5倍の解消件数となっており、認知件数、解消件数ともに増加しているのが現状です。比較的軽微な事案であっても、各校において、いじめの積極的な認知を進めており、教育委員会としては良い傾向であると捉えております。令和2年度までに認知した事案も含めて、現在も見守り等の取り組みを継続している事案の件数は、小学校では290件、中学校では83件となります。なお、現在取り組み中のいじめ重大事態事案につきましては、小学校0件、中学校3件となります。

司会
(市長政策室長)

ひと通り説明がありました。これにつきまして意見交換をしたいと思っております。市長いかがでしょうか。

市長

不登校・いじめの現状については良く分かりました。昨年末、教育センターの職員にも話を伺いました。スクールソーシャルワーカーの皆さんも含め、親身になって児童生徒と向き合い、必要な支援に繋いでくださっていることも分かりました。

ほかにもコロナが落ち着いていた時期には、多くの皆様とお話をす

る機会があり、様々なご意見をいただきました。「子ども会をはじめ、地域での活動が減っている」、「ボーイスカウトやジュニアリーダーの参加が減っている」ため、異口同音に「以前に比べて、子どもたちの社会性や自ら生きる力が不足しているのではないか」とおっしゃっていました。では、どうすれば良いのかということを考えてみました。今一度、自分の人生を振り返ってみますと、私は、岩手県陸前高田の出身で、生家は、農家で水田や麦の裏作を営んでいました。春は、田んぼに水を引きます。田植えはお天道様との戦いですから、限られた日程の中でそれぞれの田んぼに順番どおりに水を引いていきます。我が家の代掻き作業が遅れば、次の田んぼに迷惑をかけてしまいます。そのため、「痛い痒いの言っていられない。やる時はやらなければならない」という環境でした。これは、田んぼから水を抜く時も同様です。「地域全体の利益なくして、個人の利益は存在しない」そんな地域社会のさまを子どもの頃から体感して会得して育ちました。つまり、幼い頃から地域との関わり方、地域との共同体を痛いほど体得する仕組み、生きる力を育む仕組みが日常生活の中にありました。このような土台の上に学校教育があったのかもしれない。

翻って現代にあてはめると、私が経験した農村型社会は、限られた地域のみとなり、上尾市においてはほぼ皆無です。保護者の関心は、その子の特性・個性に即した教育、スポーツに力を注がれるようになりました。生きるために共通した価値観のもとで地域一体となって汗をかいたという時代はとうに無くなってきました。

では、地域社会との関わりを学校教育の中に取り込めばよいのか。先生が積極的に促せばよいのか。いろいろ考えました。しかし、これらの再構築を教育現場だけに求めることには無理があります。保護者も欲しているかは分かりません。このままで良いのか、本当に将来が心配です。

先の大震災から11年を経過しようとしています。震災直後は、支え合い、助け合いの大切さが謳われ、日本各地で共感が得られました。水も電気も食料もない状態で、最初に頼りになったのは、行政ではなく、日常の地域における関係性です。私は、『不自由を常と思えば不足なし』という徳川家康の言葉を常に意識しています。これは、ある程度我慢が必要だということだと思えますし、老子の『足るを知る』という言葉があります。これは欲張らずに今の生活の中で満足する。あるいは、自制心が無ければならないということなのかなと思っております。地域社会での教育という土台が失われた中で教育現場は容易でないと思えます。しかし、子どもたちの社会性が無くなったと憂いていても先に進みません。是非皆さんのご意見、お知恵をいただきたいと思えます。

ありがとうございました。

我々の記憶でも、幼少期の頃から日常の中に地域との関わりがあり、悪いことをすれば先生方や親以外の地域の人にも怒られたものです。しかし、市長のお話にもありましたが、その土地柄や時代の変化もあり、昔はこうだったというだけでは通用しない現代において、そ

司会
(市長政策室長)

<p>大塚委員</p>	<p>の全てを学校教育に負わせることは難しいのではないかとということでした。このあたり委員の皆様いかがでしょうか。</p> <p>思うところは同じです。子どもたちの社会性であったり、地域との繋がりというのはどんどん少なくなっています。加えて、コロナ禍により、機会が少なくなってきました。今までの繋がりも保てなくなってきた現状があるのではないかなと危惧しているところです。そんな中で、人と人とが会うことが難しい期間ができてしまう中で、どう繋がりを作っていくのか。オンラインであったり、IT機器を使うのも手だと思います。私たちよりも子どもたちの方がそういった繋がりには長けているということもあるので、そういった点をどう活かしていくのかというのも一つあるのかなと思っています。ただ、子どもたちの社会性を伸ばすためには人と人とがどう繋がっていくのか、どう関わっていくのかというのが必ず必要だと思っていますので、この点を見捨てないで、どう繋がりを持っていくのかということが、こちらの体制としても、数でカバーしていく、人でカバーしていくということが必要だと思っています。</p>
<p>市長</p>	<p>やはり人と人との繋がりは大変だと思います。今はコロナ禍による影響もありますが、基本的には大切なことです。不登校が圧倒的に多いという状況で様々な施策をやっても件数は減っていない。積極的に報告をするよう努めてくださっていることも要因ですが、対策を打ち出しているにもかかわらず効いていないというのが現状だと思っています。</p>
<p>司会 (市長政策室長)</p>	<p>中野委員いかがでしょうか。教員になられた頃と比べて今はどうでしょうか。</p>
<p>中野教育長職務代理者</p>	<p>私もいろいろと考えていましたが、この不登校やいじめの問題については、総合教育会議でも多く取り上げており取り組みを継続していますが、今も説明にあったように解決の方策が見えてこない、出口が見えない、苦しんでいる子どもたちや家庭がたくさんあるという現状があります。ここで何か手立てがないか考えていかなければならない時期になっています。市長から社会性という言葉がありましたが、やはり人との関わりというものが大切なのかなと改めて感じました。教育センターやフリースクールなどに家庭から毎日通っている子もいますが、不登校になると家庭の中に閉じ籠ってしまうケースも多くあります。そうした中で、家庭から出て自分の両親だけではなく違った人たちと関わるということが大事だと思います。小学校の低学年、高学年、中学校、それぞれ発達段階が違うけれども、多くの人と関わることで視野も広がって学ぶことも出てくると思います。それが改めて大事だなと思います。他にも、自己肯定感の醸成といいますけれども、やはり社会性だとか自ら生きる力だとか、そういうことが弱くなっている。家庭や学校で、自己肯定感を育てていく必要があるのかなと思います。それには、昔とは社会が違うので、どうしていけばよいのかという思いもあります。</p>

<p>内田委員</p>	<p>コロナ禍になってから、子どもたちがマスクをつけて学校や幼稚園でもマスクをつけていますが、幼少期のうちにマスクをつけた状態だと、子どもは相手の気持ちをよく顔色を見ると思いますが、相手の顔を見て怒っているのか喜んでいいのか分からないような気がします。特にその部分が育ってこない、これから小学校に行ったとき、小学校から中学校に行ったとき、相手の気持ちを汲み取ってあげるのが、分かってあげられるのか、その部分が育ってこないと思います。そういった面でも、いじめが増えてくるのではないかなという点も心配しています。また、自分の子の幼少期のことを考えてみますと、幼稚園のうちに子どもを親同士で、いじめですとかそういったことに敏感でした。この子とはあまり遊ばせない方が良いのではないかな、そういったことも考えて、小学校入学なども話し合ったこともあったのですが、いじめに対してはとても敏感だったけれども、不登校についてはあまり話をすることはありませんでした。それを考えると、いざ自分の子どもが不登校になったとき、心の準備が保護者としてもできていないと思います。おそらく今現在の保護者も入学にあたって、いじめについてはとても敏感でおられたと思いますが、不登校については心構えができていないのではないかなと思います。それを考えますと、保護者説明会ですとか保護者を集めての学校でのいろいろな行事で話があったりしますけれども、もしかすると不登校についてもこういう対策がありますといったことを注意していかなければ、これから先、不登校は減っていかないのではないかと感じております。不登校になってしまってからでは本当に対策というのは難しいことだと思いますので、それを防ぐ対策として子どもだけではなく保護者にもその部分話を話していかなければいけないのではないかなと感じております。</p>
<p>司会 (市長政策室長)</p>	<p>谷島委員いかがでしょうか。</p>
<p>谷島委員</p>	<p>不登校を新規に出さないということが大切ですが、それについても実際、不登校になってしまった子どもを支援するという意味でも、学校の中に限らず、外での居場所づくりが全国的に試されていると思います。やはり居場所を作ることは大切ですが、居場所だけではなく、それに対しての人的な支援、人がいることによってその効果が生まれると思います。今、学校ではいろいろなスタッフのサポート体制がありますけれども、学校の先生方の話を聞くと、まだまだその対策をしなければ、人数が増えてしまうととても手に負えないという話を聞きました。市長の話にもありましたが、人との繋がりが大切ですから、そういった人的なサポートに例えば地域の方々の力を活用することで、人との繋がりも確保できるのかなと考えています。</p>
<p>小池委員</p>	<p>人との関りという幼少期の記憶からすると、子どものときは子ども会があったりして、子ども会の行事の中で、子ども神輿、お祭りがあ</p>

ったりですとか、子ども会主催で旅行に行くといったことがあったと思います。そういった中で地域の方々とか大人と関わりがありました。最近では核家族化で共働きの家庭も多いですし、その負担を敬遠して子ども会に入らないという家庭も多くなり、地域によっては子ども会自体が無くなってしまったところもあります。そうなるとうりの方と関わる環境が減ってきているのが現実だと思ひます。その代わり、例えば中学生ですと、地域の方々がボランティアという形で敬老会に中学校の吹奏楽部の方々に協力してもらおうということをやっているのですが、子どもが地域の方々、大人と関わる環境が少なくなっているため、その機会を良い形で関われるものを作れたら、人との繋がりの中で大人から子どもに対してアドバイスをすることもできるのかなと思ひます。何が原因で不登校なのか分からないため、配布資料のリーフレットにも記載がありますが、不安という気持ちの中で不登校になるというが多く、不安というのは何が不安なのかなかなか分からない。そういうことを聞いてあげるといふか、そういう風になる前に、私が子どもの頃はそういう機会が多かったため、いろいろな自分の気持ちを吐き出せる機会が多かったと思ひます。そういう機会が今は少なくなっているのではないかと思っているため、そういう機会を設けられることを何か考えられたら、良いかと思ひています。

中野教育長職務代理者

地域の方々との関りという話がありましたけれども、本市で進めている放課後子ども教室では、地域の方々は見守りということに関わらせていただいております。私も関わっていますけれども、参加している子どもたちは、ほとんど時間帯は低学年の子ども達です。その中で、地域の何人かが見守りをし、体験の時間までは宿題など学習をする時間です。そして、一緒にお話をしながら学習の様子を見ています。その後、体験が始まると、本を読み聞かせていただいたり、科学実験をやったり、普段できない様々な体験をやっています。いろいろな子どもたちが参加していて、先日、しばらく不登校で学校に行っていない子から申込があったという話も聞きました。その時に地域の高齢者が関わって、いろいろな話をすることをその子どもたちはとても喜んでいる状況があり、これが発展的に広がっていけば、1つの方法として、公民館を居場所として地域の人たちがたくさん集まり、子どもたちもたくさん集まる取り組みとして大事にしたいと思ひています。

先ほども不安という話がありましたが、勉強に不安だとか、友たちとの関り、先生との関係で不安とか、不安という原因は子どもたちに多い。原因というものは、何年も見ていて、「こういう原因だからこうすれば良い」といふのはなかなか決まったものはないけれども、子どもたちが必要としているものは何なのか、家庭が何を求めているのか、そういう次のステップに行かなければいけないと思ひるので、教育センターでの取り組みはいろいろありますけれども、改めて、ニーズを十分に踏まえて、新たに一步を踏み出すようなことができると良いと思ひています。

<p>司会 (市長政策室長)</p>	<p>教育長いかがでしょうか。</p>
<p>教育長</p>	<p>人との繋がりや地域の中での関りが本当に少なくなってきたままで、子どもたちにとっては大きな問題だと思います。その機会を学校の中でも、地域の中でも考えていけるような仕組みとして、やっと上尾市はコミュニティスクールが軌道に乗ってきました。各校が年間で5回前後、コミュニティスクールの学校運営協議会の方々に学校に来ていただいて、一緒に熟議をしていただいています。</p> <p>不登校でも私が非常に危惧しているのは、不登校の子どもたちの中で、ずっと友達と会わずに家に閉じこもっているけれども、自分は困っているという意識は無いという子どもたちが増えてきている。つまり、スマートフォンやインターネットに繋がる機器さえあれば、自分は常に繋がっていると思っていて、会ったこともない人だけでもインターネットで繋がったことで満足している。本人は、友達と会えなくても何も困っておらず、学校に行かなければ困るといった状況が、その子にとっては無いということが指摘されています。我々、大人の社会もインターネットで繋がり、会議もオンライン会議で直接お会いしたことのない方々と社会活動が成立してしまうような世界に子どもたちも今いるということは、社会からも大きな影響を受けていると思います。しかし、これから大人になっていく子どもたちにとっては、やはり直接、人と人との繋がりや市長の話にも合ったような体験を通して、一人でするのではなくて、グループであるいは集団で活動と一緒にやるという経験なく大人になってしまったら、本当にこれは想像するしかないですけれども、人間として果たしてどうなのだろうかと心配しているところです。少しでも体験をする機会を設けて取り組んでいかなければならない。学校や地域それぞれができることを考え、支援していけると良いですし、基本は家庭だと思っています。</p>
<p>大塚委員</p>	<p>内田委員から保護者の心構えについての話がありました。我が子が不登校になったときに親の感覚としては、この子が原因で、この子に何が合ったのかと自己の問題と考えてしまうかもしれませんが、そうではなく、繋がりの中での問題として大きく捉えてあげる必要があると思っています。</p>
<p>司会 (市長政策室長)</p>	<p>ありがとうございます。その他いかがでしょうか。</p>
<p>中野教育長職務代理者</p>	<p>コロナ禍の話がありますが、先ほどの資料では小学生の不登校児童数が増えています。小学生、特に低学年では生活環境にとっても影響を受けると思います。特に今は感染拡大している中で、学級閉鎖等いろいろな対応をしていますが、学校はできる限り毎年やっていることを同じようにやらなければならないと頑張りすぎている所もあるのではないかと思います。教育の本質というのは子どもたち一人一人をじっくり見ることからだと思いますので、学習の定着も厳しい状況</p>

<p>市長</p>	<p>ではありますが、学校も家庭も全てを求めず、足元からしっかりと子どもたちのことを考えていかなければいけない時期なのかと思えます。</p> <p>地域の運動会や子ども会の行事など、コロナ禍でほとんどない状況で、私も不安に感じています。話を聞いていて感じるのは、社会性について、学校でも地域でも家庭でもやらなければならないと思いますが、社会性に対して子どもはどこまで育っているのかという感じがしています。今の状況だと子どもは自主性と言われ、学校教育に入って悩んでいる。我々の時代では、やんちゃな子もいましたが、それぞれの家庭での躰がしっかりとあったので、ある程度の常識を持った教育、我慢もできていました。わがままだけでは地域の中で生きていけない状況でした。子どもであっても体験を通して、ある程度の常識を持って学校に行っていました。ただ、今、学校でそのような部分まで教育として見てあげることができるのかと言うと難しい。社会性も教えて、授業も教えて、トラブル時には注意もしなければいけないとなると難しい。保護者としても心配になってくる。昔と比べるとそういった点も変わってしまっていると思います。</p>
<p>司会（市長政策室長）</p>	<p>市長の発言を受けて教育長いかがでしょうか。</p>
<p>教育長</p>	<p>先ほど徳川家康の言葉の話がありました。子どもたちを取り巻く大人の社会も子どもたちの良い面を捉えてみることの大切さが非常に強く言われておりますが、人間の良い面だけでなく、誰だって持っている欠点、誰でもしてしまう失敗にスポットを当てなくなっているように感じます。子どもが叱られたとなれば、指摘した内容ではなく、指摘したことに敏感になって心配されていると思います。いま子どもたちが置かれている状況はインターネットなどもあり以前とは違っています。一緒に体験したり経験してあげることで、人と人との温かみが出てくるので、そうした仕掛けができると良いと思っています。子ども会もスポーツ少年団も親の負担から参加させない家庭も増えてきていると言われております。親の考え方が子どもに及ぼしている影響もあり、学校は当然ですが、地域と家庭と一緒にやっていく必要があると思っています。</p>
<p>市長</p>	<p>上尾市では、毎年夏休みを利用して、子ども議会を実施していました。各小学校を代表して、堂々と意見を述べる生徒たちに感心させられるばかりでした。一方で、代表の生徒だけに限られてしまうことから、より多くの子どもたちから意見を伺う方法は無いかということで、今年度から「未来を担う子どもからの提案制度」を創設いたしました。</p> <p>今年のテーマは二つあり「大人から子どもまで、みんなが顔見知りになり、支え合える地域を作るために、皆さんと一緒にできることはありますか」と、「ゼロカーボン宣言のもと、脱炭素社会を実現する</p>

	<p>ために家庭や学校で出来ることはありますか」を中学生に問いました。すると、合わせて538件に及ぶ提案をいただきました。</p> <p>私も全ての提案を拝見しましたが、一つ一つ真剣に考えている中学生の息づかいが伝わってくるものでした。地域社会のあり方についても感心させられる意見が多くあり、大変嬉しく思うとともに、明るい光を感じています。</p> <p>先ほども申し上げましたが、昔は、社会性や自ら生きる力、善悪の判断などについては、地域での活動や家庭といった日常生活の中で体得したものであり、学校教育に求めるものではありませんでした。それだけに、現在の教育現場が苦勞されていることは良く分かります。不登校やいじめの問題には直接関係が無いと思われるかもしれませんが、私は子ども達に多くの経験をさせることが大切だと考えています。学校や家庭とは違う体験、例えば農業体験やボランティア活動、山や川への旅行、地域運動会でも構わないと思います。子どもたちが勉強以外の体験をもって喜びを積み重ねていくことが、その子の成長に繋がり、長じて他者との関係を築くことができるようになるものと信じています。</p> <p>我々、行政としても、この点について何ができるのか考えていく必要があると思いました。子どもが自信を持って行動ができ、判断ができるようにするためには、どうしたらよいのか考えていく必要があろうかと思えます。</p>
<p>司会（市長政策室長）</p> <p>事務局 （市長政策室次長兼課長）</p>	<p>学校だけに任せるのではなく、家庭や地域、さらには行政でも支援をしていこうということだと思います。</p> <p>続きまして、議題（2）「スポーツ科学拠点施設について」に移ります。</p> <p>事務局から説明をお願いします。</p> <p>現状について説明いたします。さいたま水上公園が半世紀に渡り皆様を楽しませてくれましたが、今年度末をもって閉園となります。この跡地に埼玉県が整備を予定しておりますスポーツ科学拠点施設の準備に向けまして、上尾市として埼玉県と協議を行っているところでございますが、その事業提案を行うため、昨年12月23日に市内関係団体の皆様と意見交換を行いました。埼玉県では、県のスポーツ推進計画であり、スポーツ参画人口の拡大施策といたしまして、屋内の50メートルプールの整備と、世界に羽ばたくアスリートを輩出する施策を打ち出しまして、拠点施設の設置を考えておりました。上尾市といたしましては、令和2年度に両施設の候補地として名乗り上げたところですが、埼玉県の選定地委員会で最終的に屋内50メートルプールについては川口市、スポーツ科学拠点施設については上尾市がそれぞれの候補地として相応しいという結論が昨年3月に出されました。</p> <p>そこで上尾市としては、皆様に愛されてきたさいたま水上公園の跡地がスポーツ科学拠点施設という名の通り、単にアスリートのためだけの施設ではなく、多くの市民、県民の皆様が集われ、笑顔があふれ、</p>

賑わいの場となるよう、埼玉県に対して事業提案をしていきたいということで議論されているところです。

埼玉県は今年度、基本計画を策定する予定です。7月には民間事業者を交えてサウンディング調査を行い、このエリアのポテンシャルやこういった施設を作っていくことが、より民間参入を含めた賑わいの場を作れるのかといった作業を進めているところです。

上尾市といたしましては、2月中には県に対して事業提案を実施していきたいと考えているところです。

市としての事業提案の素案としては、県民、市民が楽しめるエリア作りとして現時点で上尾市が県に対して提案していこうと思っているハード的な分野についての施策があります。スポーツ推進及び健康増進のための施設整備といたしまして、今、上尾運動公園の体育館が2,500人規模であります。今回、アリーナが整備されることになれば、観客席付きのアリーナを整備することで、さらに多くの人も集まることができるでしょう。また、屋内50メートルプールは川口市に整備することが決まりましたが、さいたま水上公園の水のレガシーとして、屋内25メートルプールも必要だろうと、そして、様々なスポーツの機会を創出していくことによって、そのポテンシャルも上がっていくものと考えています。

また、この地域の国道17号線が上尾運動公園とさいたま水上公園の間に通っており、現状は歩道橋で繋がっているだけです。これが、両側の土地を活かすことの足かせとなっているなどの課題もあります。道路を跨いだ幅の広いスロープのようなもので両側を繋ぐことになれば双方の土地利用が広がるでしょう。本市の市民駅伝などもこのエリア内だけで開催することも可能になるでしょうし、日常的にランニングする人も増えてくると期待しております。

憩いと癒しのエリアとして、全体として20ヘクタールを超える広い敷地があります。その中でさいたま水上公園のエリアだけで6ヘクタールがあり、その樹林地を活かしたアクティビティーという選択肢もあるのではないかと考えています。

ランニングステーションがあれば、朝からランニングをして、シャワーを浴びてから通勤することもできることから、上尾市民のみならず近隣の方も多く利用されるのかなと期待されているところです。

ソフト面の説明をいたします。スポーツ参加のイベント、「する」スポーツ、「みる」スポーツ、「ささえる」スポーツ、様々な形で運動公園と一体的となって、また、県立武道館やアイスアリーナもあることから、非常にポテンシャルの高いエリアなので、県民、市民のスポーツ参加がさらに期待できます。

本市には、バレーボールチームの埼玉上尾メディックスがあります。こういったチームが普段から拠点として活動されたり、子どもたちと触れ合うことによって、上尾の競技力向上も非常に期待されます。

スポーツ科学拠点施設という堅苦しい名称ではありますが、県民、市民の健康増進ということで、バイタルを計測するような設備も設置されると思われます。例えば上尾市ではアッピー元気体操という財産

	<p>もあることから、この体操を定期的実施したことで、例えば骨密度の測定であったり運動能力の向上など、その施設で測れることで、フレイルの予防に繋げることや、学校で言えば、生徒の教育、健康指導において貴重な資料になってくるのかなと思っております。また、食に関する健康プログラムということで、近隣には日本薬科大学もありますので、薬膳の知識を活かした健康食であったり、この施設に来ることで勉強できるということも期待されます。</p> <p>ほかにも、アスリートとの触れ合いの場となります。説明が重複いたしますが、埼玉上尾メディックスや東京オリンピックにも出場した競歩の岡田久美子選手のふるさとでもございます。そういった選手たちが日常的に活躍することによって、子どもたちであり地域の方々のふれあいも期待できます。</p> <p>その他の付加価値といたしましては、地域の防災機能の向上ということで、非常に広大な敷地でありますので、先の震災のようなことが起きたときには、やはりここが災害拠点になってくるということもありますので、そういったインフラなども整備されることが期待される場所です。</p> <p>最後に、このエリアへのアクセスについてですが、今現在、県道川越上尾線からの進入ルートのみとなります。朝夕には大変な渋滞を招いております、今後さらに多くの方々が集うとなると、さらなる渋滞を招く恐れもございます。これに関して市としてできることは微力ではありますが、国や県と協議をしながら、県道川越上尾線を介せず、国道17号線の上り車線から直にこのエリアに進入できるようにするなどし、県道川越上尾線への負荷を軽減し、愛宕交差点の渋滞を緩和するチャンスでもあると考えています。</p> <p>ここまで述べました内容につきまして、昨年12月23日に行われた、商工会議所をはじめ埼玉上尾メディックスや各大学、地元自治会の皆様から様々な事業提案をいただいております。市といたしましては、この素案をブラッシュアップし、年度内に県に対して事業提案を行ってまいります。</p> <p>説明は以上です。</p>
市長政策室長	<p>説明にあったスポーツ科学拠点施設の整備については、県の事業になります。この施設一つの整備で終わってしまうと、市には何もメリットがない状況ですので、これをきっかけに賑わい創出できるような事業を市としてこういう協力ができますよという形で提案していくということで現在準備しているところです。これにつきまして、意見交換をしたいと思っております。</p>
小池委員	<p>観客席付きアリーナや屋内25メートルプールというのは、この施設も一緒に合わせて整備してほしいということのを要望するということでしょうか。</p>
事務局 (市長政策室)	<p>その通りです。埼玉県としては、学校体育館のようなイメージでのアリーナを検討しているようですが、そこに観客席機能を付加させる</p>

次長兼課長)	<p>ことで様々なイベントに対応でき、より多くの人が集うきっかけになるのではないかと考えています。</p> <p>プールに関しては、県としては現在検討していないようですが、やはり上尾市としては、年間100万人を超える方々が来場していた、水のレガシーがありますので、是非とも50メートルプールとは言いませんが、25メートルプールを民間の力も活用しながら整備ができればと期待しております。</p>
大塚委員	<p>上尾には、埼玉上尾メディックスがあつたり、スポーツ宣言都市であり、武道館やアイスアリーナがあります。西側には市民体育館がありますが、東側にもアリーナがあると良いと思います。是非、働きかけをしていただいて、このような施設ができれば、さらに上尾市がスポーツ宣言都市としての魅力が上がってくると思います。</p>
市長政策室長	<p>その他として、次回の会議について事務局からお願いします。</p>
事務局 (市長政策室 次長兼課長)	<p>次回の会議につきましては、来年度の夏頃を予定しております。定例教育委員会に併せて開催したいと考えております。また、時期が近くなりましたら、ご連絡申し上げたいと思いますので、よろしく願いいたします。</p>
市長政策室長	<p>他に何かございますか。特に無いようでございますので、これで議事はすべて終了いたしました。</p> <p>皆様のご協力ありがとうございました。</p> <p>それでは、会議の閉会にあたり、教育委員会を代表いたしまして、池野教育長からご挨拶をいただきたいと存じます。</p>
教育長	<p>教育センターを中心に、学校と教育センターが努力して、成果も徐々に表れていると思います。文部科学省が不登校の定義を30日以上欠席となった段階で、その子を不登校として数えるとしていることから、一度でも、欠席が30日を超えた子は、途中で復帰していたとしても、不登校数に数えられてしまうという前提で動いていることから、大きく報道がされている面もある。</p> <p>この5年間、上尾市では、平成28年度には不登校になった子が44人復帰しています。平成29年度には87人、平成30年度が76人、平成31年度が71人、昨年度は83人が当年度中に復帰しています。例えば、中学校2年生には不登校でしたが、3年生では復帰しているという場合です。ただし、この数は表には出てこないの、大きく報道されることがあり、これは教育界の大きな課題であると思っています。</p> <p>併せて、何としても必要なのは、新たに不登校になることを防ぐことが大事です。困難ではあるけれども、平成29年には教育センターでは細かく分析し、平成29年度に新たに不登校になった子は200人、平成30年度は206人、平成31年度は185人、令和2度は160人ですが、この2年間はコロナ禍ということもあり、より不登</p>

<p>市長政策室長</p>	<p>校に拍車をかけています。感染症が不安であれば、登校しなくても良いということになっていますので、果たして不登校の概念で捉えて良いのか、感染症の影響ということなのか精査することが非常に難しいです。いずれにしても学校と教育センター、或いは関係機関が非常に努力いただいているのは事実であります。その中で、魅力ある事業を展開し、楽しい学校行事があるから登校したいと思ってくれる子どもを増やす努力を続けるしかないと思っています。本日は、教育委員や、市長の幼少期の体験も聞かせていただきありがとうございました。</p> <p>引き続き、総合教育会議でも議題として検討していただければありがたいと思っています。</p> <p>ありがとうございます。皆様、お疲れ様でした。以上で令和3年度第2回上尾市総合教育会議を閉会いたします。</p>
---------------	---